

朝鮮譯官行列之圖

小通詞

合旗

喇叭

吏令



▼編集▲田代和生 慶應義塾大学名誉教授

近世日朝交流史料叢書 I

通訳酬酢

つうやくしゅうさく

政治、外交、女性、音楽、礼儀作法、怪奇現象……。江戸時代の日朝関係をになった対馬藩通詞と朝鮮訳官との問答集を初公開。交流の第一線にいる人々の苦悩や活躍を描いた、近世日朝関係を探るための第一級史料。

朝鮮船入津之図

譯使東萊釜山湊五月二日

土帆同曾對別舟中浦湊台

午刻入船

朝鮮船子石積

人数八拾五人云

外上官正八人云



ゆまに 書房 YUMANI SHOBOU

田代和生

歴史研究の深化を支えるのは、良質な史料との出会いにある。近世日朝交流史研究に限れば、基礎的な史料として日朝関係を取り仕切った膨大な対馬藩宗家の記録類がある。国内外七か所に分割保管されている宗家記録のなかで、最大の蔵書点数を誇るのが対馬藩府中（対馬市厳原町）に伝わった宗家文庫本である。かつて木造の倉庫に雑然と積み上げられていたこの史料は、一九七九年より厳原町教育委員会が整理作業を開始し、断続的に約三十年の歳月をかけて、二〇一二年に古文書・古記録・絵図類など八万三千点に及ぶ目録を完成させたことで利用が容易になった。また一九九八年より、朝鮮通信使記録（韓国国史編纂委員会本・慶應義塾図書館本）、倭館の館守日記（国立国会図書館本）、裁判記録（同上）、江戸藩邸記録（東京大学史料編纂所本）など、各保管所の基礎的な史料の全冊がゆまに書房によってマイクロフィルム出版され、研究者への便宜が図られた。

ただし宗家記録以外にも、日本国内外の図書館や資料館、あるいは個人の家にも貴重な関連史料が数多く現存している。しかもこれらの史料は、総て難解な古文書で書かれており、中には漢文やハングル史料も多く含まれている。解読するための特別な訓練を受けた者は良いが、他分野の研究者や外国人研究者から見れば、それはいまだに近づきたい状態にあるといえる。五十年間にわたる研究活動の中で、近世日朝交流史研究にかかわる珠玉のごとき貴重な史料との出会いがあり、それをいつの日か表舞台に登場させ、専門家だけでなく、必要とする総ての方が理解できるように配慮した史料集の刊行をかねてから願ってきた。

本史料集は、近世日朝交流史関係の膨大な記録の中から、とくに重要と思われるものを精選し翻刻するものである。収録の対象は、日朝間の交流現場で様々な役割に従事する者の記録に限定した。具体的には、朝鮮国への使節随員による日記、対馬藩朝鮮方に伝わる記録、朝鮮語通詞による編纂書などである。これらを通読すれば、激動の時代に展開された日朝外交の実態、日本人居住区倭館の詳細、交流現場に常に介在した朝鮮語通詞の養成から活動内容、通訳官同士が交流現場で交わした会話の数々、などが明らかにされる。より広い読者にこの史料の面白みを理解していただくために、日本語（古文書）で書かれたものは、原文の校訂文と読み下し文、それに文意を把握できるような詳しい註を付した。漢文やハングル文は、状態が良ければ原本の影印版を用い、読み下し文、現代語訳・註によって内容が分かるように配慮し、その分野の専門家のご協力を仰いだ。

異文化との交流を通じて生まれた相互理解は、国際交流の原点ともいべき「国家」「社会」「人」とは何かを問いかけていく。これは現代の複雑な国際関係を理解することに通じることで、あらためて良質な史料に基づく歴史認識の重要性を喚起させ、その手がかりとなる第一級史料の発掘と解説はさらに重要なものとなっていくと確信している。

目次（部分）

通訳酬酢 解説編

序書

- 一 風儀の部 二 風楽の部 三 船上の部
四 外国の部 五 乾坤の部 六 浮説の部
七 武備の部 八 官品の部 九 女性の部
十 飲食の部 十一 酒礼の部 十二 礼儀の部

通訳酬酢 原文編

解説・小田幾五郎と「通訳酬酢」

索引

事問われ候は数十か年在館に付き、鬱気の余り戯言これあると聞こえ候。これ迄公の恥じ発話致さず候らえども、拙者共去秋丹楓見物のため梵魚寺に一統寄り合ひ、府使の將と出会い、官婢共残らず召し呼び一昼夜かの寺にて慰め、官婢十人ばかりに衆人十人はかりの者へ一統より大銀五百文くれ、その外の雑費多く候故、これ式の遊びも弊えに候。宿々買女これなく候らえども、一夜腰を採せ候らえば二、三十匁見合わせくれ候。これ等の事定めの花料これなく候。

通曰く 官婢の事、この近辺の者妓生と言ひ候。日本にて申さば傾城に当たり候。然るを官の勤めいたしおり候者、身持ち自由に相なるべき様これなく、下賤の者にても銭両を与え候時は何時も自由叶い候やに聞こえ、遊女の体にこれあり候。

訳答る 官婢に定数これなく、時々多少これあり。日々官を勤め候者三、四人これあり、その余りは非番故何時も手空きこれあり自由叶い候。下賤の者にても銭両を有数に与え候らえば持ちて、中分にても借し候人は持てず、一夜の仕切十匁内外と聞き候。妓生共この礼物を受け、その身の衣類取り繕ひ、官家より給銀これなく相勤め候。

通曰く 官婢の事を常に妓生と言ふ。監司・府使、娘立の女子を撰び出し呼び取りられ候や。又は官家

本文見本

約82%に縮小

通訳酬酢 拾 飲食の部

通曰 日本食物之内各之口合二何品宜候哉
九貞養應相濟候上
冬傳語官廳ニ而訓導別差并館守差備官監董官堂上堂下大差使差備官堂上堂下其外東菜下り合之判事供二八九貞養應相濟候上

通曰 日本之酒味如何有之候哉公等ハ未煉酒方名酒其外茂被給此内何酒宜被覚候哉
訳答 才一二杉焼才二鯉鱈才三漬焼素麵人々好候
日本之名酒種々給候へ共皆々蜜水ニ候常ニ用ヒ有之上酒社実之酒ニ而我国之人々好是口味与云酔心地別而宜其内少々酒味遠候得共惣体日本之上酒結構ニ候我国ニ茂名酒有之候へ共是又蜜之味加へ焼酒を以日本之上酒ニ可類強キを才一二造り候北京其外夷狄之酒焼酒多有之候日本国者米宜候故酒ニおめてハ天下才一と覚候

通曰 日本之上酒を天下一与被論嘗過ニ候然らハ貴国ニ用有之候ハ、救百挺御求可被成を味而已宜と有之樽ニ而御調へ不被成振廻候時者何連茂酒量丈御用有之誠ニ御儉約之儀感し入候乍去貴国之焼酒我国之酒客宜覚候与之論有之拙者下戸口ニ者梨花酒方紋酒之類焼酒より造り出し有之味候へ共蜜湯を冷し給候口味有之朝鮮者強キ焼酒を以人々酒盛有之候へ共常肉食被致脾腫強故男女共ニ聲高

本文見本

約82%に縮小

2 朝鮮語通詞としての小田幾五郎

専門職としての通詞は、幾五郎が生まれるかなり以前、儒学者雨森芳洲の改革によって大きくしていた。芳洲は通詞について「館守・裁判・代官と並ぶ重要な役人」(『交隣提議』)と述べ、国の重大時にかかわる要職が商人の家庭教育頼みだったことに強い危機感を抱いていた。そこで享保十二年(一七二七)、対馬府中に藩営の通詞養成所を創設させ、ここに六十人商人の子弟を中心とする生徒を募集して、現役の通詞中を総動員し後進の育成強化を図った。単なる「言葉上手」ではない、「才智」一篇「学問」を共に備えよと、朝鮮側の日本語通事(倭学訳官)に劣らぬ、知識人を目指した英才教育が実践されていく。通詞職の組織も補強され、これまで大通詞・本通詞・稽古通詞だった構成員に、新たに「五人通詞」を稽古通詞の下に置くこととした。さらに養成所で優秀な成績を取った者を、公費で和館留学させる「詞稽古御免札」の制度も整えられた。

小田幾五郎は、安永三年(一七七四)二十歳のときに「詞稽古御免札」を受けている。御免札は、通詞養成所での訓練を受けた者に限られることから、芳洲の教育方針に沿った特訓を受けたことは間違いない。この時期に芳洲が定めた課題は、東向寺僧侶が指導する「小学」「四書」「古文」「三体詩」など漢籍の読書、あるいは倭学訳官らに交えた指導の下で「類合」(朝鮮音訓学習書)、「十八史略」(歴史書)、「物名世」(語彙書)、「韓語撮要」(用語集)、「淑香伝」(ハングル小説)などを朝鮮音で講読することである。厳しい留学時代を終え、ここからさらに本役である通詞中へ進むとなると、人数はさらに絞られ

本文見本

約82%に縮小

本書の特色と内容



●著者・小田幾五郎と『通訳酬酢』

小田幾五郎（1755～1831）は対馬藩の特権の名門商人「古六十人」の一族で、朝鮮語大通詞にまで昇進。通詞として秀でただけでなく、誠実で政治的な交渉能力にも長け、倭館館守を4期勤めた戸田頼母に重用されるが、藩内部の争いにまきこまれ禁足の刑を受ける。晩年、後輩通詞のためにまとめた書『通訳酬酢』が本書である。「酬酢」とは「応対する」の意味で「酢」の本字は「酢」。

に応じ藩が雇いあげた商人であった。特権的商人のうちから厳しい訓練をへて「朝鮮語通詞」が選ばれ、藩営の通詞養成所で英才教育が行われた。

●朝鮮の「倭学訳官」とは

国家試験（雑科）に合格し日本文化にも精通する教養人の訳官だが、身分的には両班と常民（平民）の中間階層。彼らの悩みも問答の中に描かれている。

●底本・韓国国史編纂委員会蔵本

本書は小田幾五郎著『通訳酬酢』（3冊12巻）の全文を翻刻。底本は自筆原本である韓国国史編纂委員会蔵本（対馬宗家文書記録類4313～4315）を用いた。このうち欠本である「巻八 官品の部」は旧本『通訳実論』（長崎県対馬市鍵屋歴史館蔵）で補った。

●「解説編」「原文編」に分けて収録

「解説編」は、原文に句読点を付して読み下し、難解な語句には註を付して解説。漢字は常用漢字に改めた。原文に従い、「通曰く」「訳答る」等会話の主を文頭に出し、説明部分は改行して会話部分と区別した。「原文編」は、底本を原文どおりに翻刻した。

●編者による詳細な解説と索引を附す

巻末に編者による詳細な解説を収録。また、史料活用の便をはかるため、索引を附した。

●様々な分野に及ぶ日朝問答集

本書は、朝鮮外交を担った朝鮮側の訳官と対馬の通詞の問答集。内容は、外交、歴史、地理、政治、経済、制度、産業、交通、情報、宗教、思想、教育、文学、美術、音楽、食物、自然、怪奇現象等々、さらに為政者から庶民階級にいたる人々の行動や考え方、礼儀作法に迄及ぶ。日朝外交の第一線にいる通訳官同士の本音が伝わる一級史料。

●対馬藩の「朝鮮語通詞」とは

対馬藩でも実際に交渉役を担った「通詞」は、武士ではなく、必要

『近世日朝交流史料叢書』今後の予定

※刊行年月・定価は未定です。

◆近世日朝交流史料叢書 II

- 『御上京之時毎日記』筆者不明（寛永6〈1629〉年）
- 『方長老上京日史』規伯玄方 著（寛永6〈1629〉年）
- 『方長老上京往復書簡』阿比留恒久 編（寛永4〈1627〉年～寛永7〈1630〉年）
- 『飲氷行記』鄭弘溟 著（仁祖7〈1629〉年）

◆近世日朝交流史料叢書 III

- 『朝鮮行日誌』筆者不明（明治5〈1872〉年）

◆近世日朝交流史料叢書 IV

- 『斛一件覚書』雨森芳洲ほか編（宝永5〈1707〉年）
- 『詞稽古之者仕立記録』雨森芳洲 著（元文元〈1736〉年）
- 『韓語稽古規則』朝鮮語通詞 編（明治前期）

◆近世日朝交流史料叢書 V

- 『贅言試集』筆者不明（近世後期）
- 『草梁話集』小田幾五郎 著（文政8〈1825〉年）
- 『象胥紀聞拾遺』上・下 小田管作 著（近世後期）

※表紙図版：（上・下ともに）「朝鮮船入津之圖・朝鮮訳官行列之圖」（部分・慶應義塾大学文学部古文書室蔵）

関連企画

対馬宗家文書

【監修】田代和生 マイクロフィルム版 16mmポジティブロール

紀伊國屋書店専売商品

- 第I期◆朝鮮通信使記録 全137リール+別冊3 揃定価：本体5,934,000円+税（分売不可）
- 第II期◆江戸藩邸毎日記 全96リール+別冊3 揃定価：本体4,500,000円+税（分売不可）
- 第III期◆倭館館守日記・裁判記録 全120リール+別冊3 揃定価：本体5,625,000円+税（分売不可）

ゆまに書房 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6 TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493

http://www.yumani.co.jp/

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日		※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。	
ご注文書	通訳酬酢 近世日朝交流史料叢書 I		取扱店
	定価：本体5,800円+税 ISBN978-4-8433-5167-3 C3321		
お名前			
ご住所	TEL ()		